

平成28年度
宇都宮短期大学附属高等学校入学試験問題

国語

――注意――

- 1 監督者の「始め」の合図があるまでは、開いてはいけません。
- 2 試験時間は、板書されている時間割のとおりの50分間です。
- 3 問題数は大きな問題が4問で、表紙を除いて10ページです。四は記述問題です。
- 4 解答用紙は2枚で、答え方はマークシート方式と記述式です。
- 5 監督者の指示にしたがって、試験開始前に受験番号と氏名をマークシート解答用紙のきめられた欄に書き、さらに受験番号をマーク欄にマークしなさい。
- 6 監督者の指示にしたがって、試験開始前に受験番号と氏名を記述用解答用紙のきめられた欄に書き、さらにバーコードシールをきめられた枠の中に貼りなさい。
- 7 答えは、それぞれの解答用紙に記載されている注意事項にしたがって、ていねいに記入しなさい。
- 8 試験中に質問があれば、手をあげて監督者に聞きなさい。
- 9 監督者の「やめ」の合図があったら、すぐやめて、鉛筆をおきなさい。

一 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えよ。

人類の長い歴史の中で「いかに生きるか」という問い合わせが発せられたのはそう古いことではない。そのような問い合わせとして意味を持ち得るためにには「いかに生くべきか」という問い合わせに対し自ら答えを出し、その答えに従つて生きて行く可能性が少なくとも存在していなければならないからである。

しかし、そのような可能性は古代にはほとんどなかつたといつてよいだろう。西欧の古代末期には特別な運命にもとあそばれた個人が自分の運命について考察している例はある。しかしそれは特殊な例であつて、私たちが「いかに生きるべきか」と自ら問うような場合は異なる。中世においてすら中頃までは父親の職業を継ぐのがふつうの人生であった。

十二世紀頃になつて（a）「いかに生きるか」という問い合わせが実質的な意味をもつことになつた。この頃に都市が成立し、そこで新たな職業選択の可能性が開かれていたからである。農村出身の子弟は都市でギルドやツンフト（手工業組合）の職人になる可能性があつたし、大学に進学し、法律家や官僚、司祭になる可能性も生まれていた。このような可能性が開かれたとき、はじめて人は「いかに生きるか」という問い合わせに直面したのである。それまでは父親の職業を継ぐことが当然のこととされていた。いまやなにを職業とすべきかを考える中で「いかに生きるか」という問い合わせが重要な意味をもつたのである。

これが「教養」の始まりであった。^②この頃多少知的関心がある人はこの問い合わせをローマ末期の作家たちに問いかけていた。当時の俗語としてのフランス語やドイツ語ではこのような問い合わせに答えることはできなかつたからである。ラテン語の能力はこの頃洗練され、人々は文法的な誤りなくラテン語を話せるようになつっていた。そのラテン語を用いて「いかに生きるか」という問い合わせが立てられていた。

その答えは（b）述べたようにローマ末期の作家たちによつて用意されていたから、この頃の人々はまずラテン語で答えを考えたのである。ローマが衰退し、滅亡の危機にあつたとき、人々はその中で「いかに生きるべきか」という問い合わせに苦心して答えを出そうとしていたのである。この時以後西欧社会の特に都市社会の住人にはローマ末期の人々の文献がこのような問い合わせに対する基本的な答えとなつた。その結果、後においても「教養」はなによりもまず古典語と結びつくことになつたのである。

この時代は西欧においてはきわめて重要な画期であつた。^③西欧社会においてはじめて個人が誕生し、男女の恋愛も新しい局面に入つていつた。西欧社会はこの頃から個人と社会の関係に意を用いなければならなくなつていたのである。

A 教養の始まりは「いかに生きるか」という問い合わせを立てたことになった。

B 「いかに生きるか」という問いはまず都市の住人の中から生まれたから、そのような問いを自ら立てた人も最初は数が少なかつた。

C 人口の大部分は相変わらず親の職業を継ぐ人生を送つていてある。

D しかし人口の大半は未だ農業に従事し、新たに生まれた都市の人口もそれほど多くはなかつた。

そのような問いを立て得たのは都市の数少ない人々なのであつた。

しかしそのようないいを立てられる以前、あるいは以後でもそのような問い合わせ立てる必要がなかつた人々にとつて人生はどのようなものだつたのだろうか。教養の始まりが「いかに生きるか」という問い合わせあつたとすれば農業などの伝統的職業に従事していた人々には教養は無縁なものだつたのだろうか。

この問題に答える前に教養の定義をしておかなければならぬだろう。教養についてはこれまで様々な定義がなされてきた。しかしそのほとんどは西欧社会の特定の時代に成立した **c** 狹いものであつた。

これまでの教養概念の中心には、文字があり書物がおかれていた。「教養がある」人とは多くの書物を読み、古今の文献に通じている人を指すことが多かつた。当然読書の結果その人は世の中をよく知り、様々な事柄について的確な判断ができるとされていた。ときには「教養がある」人とは人格者でもあるとされていた。しかし歴史

的にたどつてみると、それらは個人の教養に過ぎず、教養概念の一部分でしかないことが解る。「いかに生きるか」という問いを自ら立てる必要がなく、人生を大過なく渡つていた人々は数多くいたのである。それらの人々のことを考慮に入れ、「教養」の定義をするとすれば、次のようになるのであろう。

「自分が社会の中でどのような位置にあり、社会のためになにができるかを知つてゐる状態、あるいはそれを知ろうと努力していいる状況」を「教養」があるというのである。そうだとするとそのような態度は人類の成立以来の伝統的な生活態度であつたことが解るだろう。

たとえば農業に従事している人を考えてみよう。彼らは自分たちの仕事が人々の生活を支えていることを知つていてある。自分たちの仕事が社会の中でどのような位置を占めているかについては自ら考えをめぐらすことはなくとも、知つていてある。
d 彼らがそのことを言葉に出して語るためにはもう一つの「教養」つまり文字が必要であったから、それが言葉になるためには長い年月が必要であった。しかし彼らはこうしたこと自身で知つていたから、「いかに生きるか」という問いを立てる必要もなかつたのである。⁽⁵⁾ こうした人々の人生に向かう姿勢をあげて教養というとすれば、それは集団の教養というべきものであろう。

(阿部謹也「教養」とは何か」から)

(注) ギルド＝中世ヨーロッパの同業者組合

問一

① しかし、そのような可能性は古代にはほとんどなかつたとあるが、その理由として適当でないものはどれか。

ア 人々が職業の選択肢を持つたのは、都市が成立してからだつたから

イ 「いかに生きるか」という問い合わせ実質的な意味をもち始めたのは十二世紀に入つてからだつたから

ウ 古代末期には、なにを職業にすべきかを自分自身で考えなければならなかつたから

エ 中世中頃までは、父親の職業を継ぐことが当然のこととされていたから

問二

（　　a　　）から（　　d　　）に入る語の組み合わせとして適当なものはどうか。

ア 「a はじめて b ただし c きわめて d すでに」

イ 「a きわめて b ただし c すでに d はじめて」

ウ 「a はじめて b すでに c きわめて d ただし」

エ 「a きわめて b すでに c ただし d はじめて」

問四

③ ④ 画期、局面の本文中での意味の組み合わせとして適当なものはどれか。

ア 「③ ゴール ④ 見解」

イ 「③ スタート地点 ④ 情勢」

ウ 「③ 改革 ④ 展開」

エ 「③ 時代 ④ 関係」

⑤ ⑥ 本文中の A から D の文を正しい順序に並びかえたものはどれか。

エ ウ イ ア
「 — — — —
[A] [C] [A] [D]
↓ ↓ ↓ ↓
[B] [A] [C] [B]
↓ ↓ ↓ ↓
[D] [D] [B] [C]
↓ ↓ ↓ ↓
[C] [B] [D] [A]
— — — —」

問三

② この頃多少知的関心がある人は……問い合わせていた。とあるが、「多少知的関心がある人」と限定している理由として最も適当なものはどれか。

ア 「教養」の始まりが「いかに生きるか」という問い合わせであり、その教養概念の中心にある書物は古典語で書かれていたから

イ 新しい西欧社会における、個人と社会の関係に意を用いた職業選択の場では、「教養」が求められていたから

ウ 「いかに生きるか」という問い合わせを生み出したのもその基本的な答えを発見したのも、知的水準の高い都市の住人だつたから
エ 古典文献を読むには、俗語であるフランス語やドイツ語だけでなくラテン語の文法的な能力も必要とされていたから

問六

※

に入る言葉として適當なものはどうか。

ア 集団的な「教養」

イ 個人の生活態度

ウ 人類の成立以来の伝統

エ 職業選択の可能性

問七⁽⁵⁾ こうした人々とあるが、その説明として最も適當なものはどうか。

ア 自分たちが社会でどのような位置を占めるかを知つていて、それを言葉で表現しようとしていた人々

イ 伝統的な職業に従事しながらも、「いかに生きるか」という問いを立てて考察していた人々

ウ 自分たちの仕事について言葉に出して語るためには、「教養」が必要であると実感していた人々

エ 社会の中での自己の位置づけや、周囲のためにできることを知つていた人々

問九

本文の中で述べられている内容と合うものはどれか。

ア 「教養」の概念は、「いかに生きるか」というラテン語の論理から生まれたため、少数の人々しか関心をもたなかつた。

イ 職業選択の可能性は、都市が発達して誰もが大学に進学できるようになってはじめて開かれた。

ウ 「教養」の概念は、「いかに生きるべきか」を問う場合に生まれ、古代末期より実質的な意味を持つようになった。

エ 「教養」は、伝統的職業に従事していた人々にも見られた。

うとする集団の教養

イ 「いかに生きるべきか」という問い合わせを求めるようとする個人の権利としての教養と、社会における自分の職種の立ち位置を身体で知つている集団が持つ教養

ウ ローマ末期の文献を読み解くことのできる語学力を身に付けるとする個人の意思に基づく教養と、人生を大過なく渡れる技術を身に付けている集団の中での教養

エ 個人が「いかに生きるか」という問い合わせから発生した狭い範囲内の教養と、集団の中で自分の仕事が人々の支えになることを理解しているという意味での集団の教養

—

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

「私」は娘の「玉子」とともに、「父」の内祝いの支度を整えていた。

つくづく見るそのちいさい魚。生きは極上だつた。えも言われぬ美しい整つたすがたをしていいる。^{ひれ}鰓の薄い膜は人体のどこにもない美しさ、穏やかな眼つき、一枚も損じていない鱗、魚のからだ中の表情がすなおだつた。魚屋の盤台に並ぶ魚にだつて表情はいろいろある。潮を離れるとき絶叫したことをおもわせるのもあるし、ふわふわとあがつて来てしまつたというのも、さんざん駆引をしてくだされきつたのもある。眼に血をさしたむごい形相のさえもいる。これ等は親魚に言いつけられると何の疑うところもなく忽ち、はいと言つてまつすぐうちにやつて來た魚だ。^{まなこ}^{たおま}あわれに美しく、あまりに可憐な魚だつた。秋の快氣祝いには、^③これの親兄弟一族がずらつとやつて来るつもりだらう。この幼い魚をおとうさんにおあげしよう。誰にも雑用が多く、訪問者にもさまたげられ、台處に専心できなかつた。夜はなんとなくいやだつたから昼にした。

を以て、ショッちゅう入り乱れ、どうかするとそれは眼前のことではなくて数年後の予想のようにおもわれる。はた眼にも私はぼんやりして見えたろうが、自分にはそれを錯乱とも分裂とも思わず、気が張りすぎて間がぬけたといったたちの不手際をし出かしてばかりいた。^④私はお膳へ御酒を忘れてしまったのである。あれほどよく知りつくしているのに忘れた。ともしい膳を枕元に据えて詫び、「形ばか
りでございますが、お食氣があるなら赤の御飯一箸めしあがつてください」と言つた。秋、気候がよくなつてものの味がうまくなるとき、親しい誰彼が皆寄つて賑^{にぎ}やかな祝宴をすることが、春からまつてい、父もそれを楽しみにして、「身祝いにわたしも何か御馳走する」と言い、主人役の私と玉子は趣向を話しあつたりしていた。言わばきょうは、はじめからほんの内祝いのつもりだった。

「折角だがとてもたべられない」と言い、蒲団の上へ載せろと指さす。いつもの通り右下に臥てい、枕が低くて下に置いた会席膳は見えず、眼がそちらを見ようとしていた。いまさらあまり粗相で、相濟まなくて見せたくなかつた。父は待つてゐるし、見せないわけには行かない。膳を蒲団の上へ載せた。⁽⁵⁾眼が椀から皿へ、皿から皿へだんだんまじめに見て行つた。今なにか言われるか今なにか言われるか、私はこわさで一杯だつた。^{いっぽい}父は長いこと茶碗へ盛つた赤の御飯や小さい鯛^{たい}や甘煮を丁寧に見ていた。もう私はとてもたまらなかつた。膳をさげようとする、とつと父の左手が伸び膳のへりに指が鍵にかかるつて、私の方へぐつと手ごたえがした。ぐつ、ぐつと徐々

に、もっと力を入れて手前の方へ引きよせ、そのあいだじゅう横眼に流れた眼がまだ皿から皿へ、ゆっくり移っていた。なんとしても私も手が放せなかつた。負けては大変だとおもつて、「**a**」引くといつしょに御飯も皿も「**b**」ずり寄つて、吸物すいものがあふれ、父はするすると夏がけの下へ手をひっこめ、しづかに仰向あおむかきになると眼を閉じたままにこつと笑つた。

膳をそこへ置いて、父を見ていると、いつまでも笑つている。

(c) フラッショを浴びたよう悟れた。おとうさんは子供のときを思いだしている、おばあさんがきっとこんなお膳をこしらえたことがあるんだ、うちは貧乏だったというからこんなお膳だつたんだ。たしかめたさを押えることができなかつた。「おとうさん何笑つていらっしゃるの?」「うむ?ああ、おまえまだそこにいたのか。私は閃いたことを確かだと思つた。父の眼は涙があつたんじやないかと思われるほど優しかつた。そういう優しい眼はめつたに見せないけれど、父の特徴ある眼つきだつた。涙ではないのである。「I」「笑つていらしたのよおとうさん?」「うむ。飯はあるんだろ?」「赤の御飯?」「ああ。」「ええ、どつさり炊いたから?」「まだだろ、早くおあがり。」

父はその母に愛されざるの子だつたと、父自身言つていた。それだのに、おばあさんの亡くなつたとき号泣して、私と弟はびっくりして笑つてしまつた。私も父に愛されざるの子だと思つていた。延のぶ子叔母こおばははつきり言つた。「おとうさんは文ちゃんあやをかわゆくないやつだとおつしやつたよ。かわいかつた子はみんな亡くなつて文ちゃん

ん一人残つて、泣いたりおこつたりしながら、それでもおとうさんのお世話しているだろ。それを思うとおばさんは蔭ながら旗はたを掉つても芳しくない私の、いやだいやだとおもつてゐる家事婦としての資格で叔母に応援されたことは、私を忍耐させ慰めた。ひがみ根性ばかりでなく、事実私はかわゆくないところのある子だつたらしい。疎くされたことは悲しく、悲しみは恨みに生長し、年とともにいよいよ頑なであつた。「III」。そのゆえに恨みは深く長かつた。

おもいがけない小さい鰯が波の間から、ぴかっとお膳へのつかつた。自然には法則もあるけれど勝手気ままなどころもある。表うわつ面づらを向いた子ばかり生れるわけでもなけりや、裏目に編まれて出て来るやつもいて不思議はない。愛されざるも愛されるも、もと二個ではない。愛された子も愛されざる子も子、愛された子にも愛されざる子にも親は親、すべての子はその父の愛子まなこなり。父に詫びたく思つた。わが恨みのゆえにわが心を長く汚して、つまらないことをした。感心屋なきゆだの泣虫なきむしだのと言われている私に、涙も感激もなくて手持無沙汰のようだつた。喜びを分析すると、澄むとか洗うとかいう部分があるものだらうか。解脱げだつといえるかどうか知らないが、永いあいだのものが「d」気の變るときは、感激やら涙やらの伴奏なしに、そのことだけが静かについと折れるのだろうか。

(IV)

小さい鰯は四人で分けて食べた。

(幸田文「父—その日」)から

問一 ①えも言われぬ、あわれにの本文中での意味の組み合わせとして適当なものはどれか。

- ア 「①表現できない
②しみじみと」
イ 「①説明できない
②同情をひくほど」
ウ 「①見たこともない
②かなしいくらい」
エ 「①この世のものとは思えない
②無残にも」

問二 ③これの親兄弟一族がずらつとやつて来るつもりだろう。とあるが、この部分で使われている表現技法と同じ技法が使われているのは、本文中の~~~~線アからエのどれか。

- ア 生きは極上だった。
ウ 生きは極上だった。
イ 人体のどこにもない美しさ、
エ 潮を離れるとき絶叫した

問三 ④私はお膳へ御酒を忘れてしまったのである。とあるが、その理由として適当なものはどれか。

- ア 雜用や来客の対応に追われて、台所仕事に集中できていなかつたから

- イ 「父」が元気だったころの記憶がよみがえり、懐かしさで胸がふさがってしまっていたから
ウ 他の手につかないほど、「父」の生死のことで頭がいっぱいになってしまったから

工 厳格な「父」への対応や、客を迎える準備に緊張しすぎていたから

問四 ⑤眼が椀から皿へ、……見て行つた。からしづかに仰向きになると……笑つた。に至る「父」の様子を、「私」はどのよう

ア 祝いの膳としてはあまりに粗末な会席膳に不満を覚えたもの、自分の人生にはこれがふさわしいのだと思い直している。

イ 「私」の不手際にいらだちながらも、自分のために皆が祝いの席を設けてくれたことには感謝している。

ウ 「私」の料理の腕を確かめる中で、わが子の成長を確信して満足している。

工 自分のために用意された会席膳を目で味わおうとしていたが、いつしか過去の記憶の中につづかりつかつてしまっている。

問五 (a) から (d) に入る語の組み合わせとして適当なものはどれか。

- ア 「a ぎゅつと b ずっと c さつと d ふつと」
イ 「a ずっと b さつと c ふつと d ぎゅつと」
ウ 「a さつと b ふつと c ぎゅつと d ずっと」
エ 「a ふつと b ぎゅつと c ずっと d さつと」

問六 次の一文が入るところは、本文中の「**I**」から「**IV**」のどこか。適当なものを後から選べ。

私はほんとに父に愛されたかつた。

ア「**I**」 **イ**「**II**」 **ウ**「**III**」 **エ**「**IV**」

問七 ⁽⁷⁾ 私と弟はびっくりして笑つてしまつた。とあるが、その理由として適當なものはどれか。

ア 「おばあさん」を嫌つていた「父」の、彼女に対するわだかまりが解けるなど予想もしていなかつたから

イ 「おばあさん」と良好な関係を築けなかつたはずの「父」が、悲しみをむき出しにしたことがあまりにも意外だつたから

ウ 「おばあさん」に嫌われてひねくれた性格になつてしまつた「父」が、素直さを取り戻したことを感じて安堵あんどしたから

エ 「おばあさん」との確執があつた「父」にも彼女に対する愛情があつたことを知り、ほほえましく思つたから

ア 自分の頑固な性格が「父」だけでなく自分自身をも傷つけていたことを「小さな鯛」の存在から悟り、今までの人生をむなしものだと感じている。

イ 自分が本当は「父」から愛されていたことに思い当たつたものの、「父」の死期が迫つた今では感謝の気持ちを伝えることもできず、後悔の念にさいなまれている。

ウ 自分を長年呪縛してきた「父」への思いから解放されたにも関わらず、案外、大きな感情の動きはなかつたことに拍子抜けしている。

エ 自分の思い込みで「父」に対して憎しみを抱いてきたことに気付いて罪悪感に駆られているが、どうする術すべもなく途方にくっている。

問九 この文章の文体の特徴として最も適當なものはどれか。

ア 過去の出来事を回想する形で書かれており、第三者の視点から状況をとらえようとしている。

イ たんたんとした簡潔な文章の中にも、きめ細やかな感性をうかがわせている。

ウ 比喩や抽象的な漢語を多く用いることで、読者にも臨場感を伝えている。

問八 ⁽⁸⁾ 感心屋だの……手持無沙汰のようだつた。とあるが、その

ときの「私」の様子として最も適當なものはどれか。

ア 登場人物それぞれの内面に立ち入ることで、物語展開を立体的なものにしている。

三

次の文章を読んで、後の問い合わせに答えよ。

(注) 福原大相国禪門、いみじかりける人なり。折悪しく、にがにがしきことなれども、その主のたはぶれと思ひてしつるをば、かれがとぶらひに、をかしからぬをも笑ひ、いかなる誤りをし、あさましきわざをしたれども、荒き声をも立てず。冬寒きころは、小侍どもわが衣の裾の下に臥せて、つとめでは、朝寝したれば、やをらぬき出でて、思ふばかり寝させけり。召し使ふにも及ばぬ末のものなれども、それがかたざまのもの見るところにては、人

数なる由をもてなし給ひければ、いみじき面目にて、心にしみて、 と思ひけり。かやうの情けにて、ありとあるたぐひ思ひつきけり。人の心を感じしむとはこれなり。

(「十訓抄」から)

(注) 福原大相国禪門 || 平清盛のこと

問一 (a) あさましき、(b) あさましき

ア みじめな
ウ 不都合な

イ ひどい
エ 恐れ多い

問四 (2) 末のものなれども、の解釈として適當なものはどれか。

ア イ 気のきかない者だが、身分の低い者であっても、

ウ エ 年若い者なので、お気に入りの者なので、

問五 本文中から読み取れる「福原大相国禪門」の人物像として適當なものはどれか。

ア イ 大げさな演技で親切の押し売りをするようなずる賢い人物
ウ エ 亂暴者だったが改心し、寛大な心を持つようになった人物
誰にでも気づかえるような性格で、人望を集めていた人物

(2) やをら
ア そつと
ウ 無理やり

問二

 に入る言葉として適當なものはどれか。

ア うれし イ あやし ウ いとほし エ あたらし

問三 (1)

思ふばかり寝させけり。とあるが、①誰が、②誰を「寝させ」たのか。その組み合わせとして適當なものはどれか。

ア 「①その主
②福原大相国禪門」
イ 「①小侍ども
②その主」
ウ 「①福原大相国禪門
②小侍ども」
エ 「①福原大相国禪門
②その主」

四

次の文章を読んで、後の問い合わせに答えよ。

山道を車で走っていると、しばしば「落石注意」という標識にぶつかる。親切はありがたいが、では①|具体的にどんな注意をしたらしいのか、なかなかむずかしい。▼それでも一応は、地盤が緩くて石が落ちそうな個所はないかと、前方を注視してみたりする。標識の効果は、それなりにあるというべきか。ところが、先日の山陽新幹線のような例は困る。走っている「ひかり」を、はがれ落ちたトンネル内壁のコンクリート塊が直撃、屋根が大破した一件だ。▼乗客は天から石の塊^(b)が降つてくるなどとは□にも思わない。これからは車内に「落石注意」の標識でも出すのだろうか。▼古代中国の杞^(c)という国に、天地が崩れ落ちたら身の置き所がなくなると心配するあまり、寝ることも食べることもできない人がいた。取り越し苦労とか無用の心配を「杞憂」⁽²⁾というのは、『列子』^(註)に出てくるこの話が始まりだ。しかし、こんどの事故では、杞の国人の人を笑えまい。▼『列子』には続きがあつて、心配する者のところにある人が出かけ、天地は崩壊しないから不安にならなくていい、と熱心にあれこれ説く。心配男もついには安心し、たいそう喜ぶのである。▼新幹線で事故が続いた際、当時の国鉄は電車を半日単位で計四回、ほぼ全面的に運休し全線を点検した。その再現を真剣に考えるべきだ。

(注) 『列子』＝中国の思想書

(朝日新聞「天声人語」から)

問一 (a) 緩、(b) 塊、(c) 崩壊の読みをひらがなで書きなさい。

問二 ①|具体的の対義語を答えなさい。

問三 ②|杞憂⁽²⁾のように、中国の昔の話をもとにして作られた語を何と呼ぶか。漢字四字で答えなさい。

問四 □に入る言葉を、ひらがなで答えなさい。

問五 ③|笑えまいを意味を変えずに、七字で言い換えなさい。

問六 ④|新幹線で事故が……点検した。という一文の、文の種類を示した次の語の□に適切な一字を入れなさい。

□ 文

